

釣りに釣られて

高原英夫

第十三回 「テトラの穴釣り」

十月ともなると、山にキノコ採りに行かねばならないし、海では岸にアブラメの大きいやつが寄りはじめる。心は山に海にと千々に乱れる。しかし、もちろんこれは釣りの話。

「いいどこ見つけた。いいアブラメいっぱいだ」

K君は、その場所を誰からか聞きつけたらしく、平内町のある漁港にいい穴場を見つけたというのだ。私は転勤してしばらく青森にいなかったのだが、青森に戻つてすぐの春のある日、早速出かけることになった。言葉どおりの成果で、アブラメが産卵のため岸に寄る秋には、どういうことになるんだろうと期待は大きく膨らんだ。

ただ、その穴場は岸壁ではなかった。ホタテ漁の船置場から五十メートルは沖に並んだ消波堤のテトラポッドがそれだった。

そこへ渡るにはボートが要るのだが、K君のアキレス製のゴムボートは、相当年

季が入っていた。折りたたんだ角ごとに擦れて空気があつちこつちから漏れてきそ
うで、そこから中修理したゴムが鬼軍曹の勲章のように貼ってあった。

それから数年、毎年秋が来ると

「そろそろかなあ」

「この間近くを通つたら、藻が出始めていたなあ」

十月はつまり、この藻が近くの岸壁、テトラ回りに伸び始める頃なのである。二
〜三メートルの浅場となると、すっかり海底が見える。そこにホンダワラの藻が伸
びて、やがて杉の木のようにすつくと何十本も立ち始める。そして鬱蒼とした森の
ようになるすこし前の頃、その根元にデカイやつが確実にやってくるのだ。その頃
合いを計り、まずはと行ってみるのである。

沖に一本二〜三十メートルのテトラが、一列に何本も横に並んでいる。それをな
がめつつ、車からボートを降ろし、底板を入れ、座板を取りつける。私はその間空
気入れに専念する。空気室は前後に分けられているので同じ張り具合にするよう
にしなければならない。

「イチ、ニー、サン、シー…」

数えながら足で踏み、空気を入れる。そして、今日左から四番目のテトラに上がると決めた。およそ何回踏むとパンパンになるかは、何度もやっているのわかっている。

だが、時として「プスー」と小さな空気が漏れる音がする。耳を澄ませやつとその場所をみつけ、小さな穴にビニールテープを貼ったり、接着剤をつけたりと、いつものことなのでなんなく塞いでしまう。

エツチラ、オツチラ漕いで沖のテトラにしがみつく。ロープで結いつけ、さあ釣りとなる。

そのいでたちが肝心なのだ。テトラに上がれば、あと平らな場所はどこにもない。だから、クラーラーなどはもちろん持って歩けるわけがない。いちいちどっかに行つて、釣れたら入れて、また戻つて釣るといふことなどとてもできるものではない。当然、用具一式を身にまとうこととなる。そこでK君と溪流釣りに出かけた経験と技がここで大いに役立つのである。

腰のベルトには、エサ箱にイソメを入れ、溪流釣りに使っているピクをつける。その場ですべてまかなえるようにする。竿は一本だけ、私はカレイ釣りに使っているのがちょうど良い。リールはスピニングが良い。

二人でテトラのまん中あたりにボートをつけると、私は右の方へ、彼は左の方へと別れ、釣り始める。足元のテトラの間の暗く陰になった所に赤いブラクリに二匹くらいのイソメをかけて落としてやる。いればすぐくる。小さいやつはクツ、クツときてパツと離れる。いつまでやつても針かかりはしないし、釣れても放してやる様なやつだ。

大きいのは違う。そもそのあたりが違う。コツじゃない、ゴツ、ゴツだ。いきなり、真下へ引いていく。何しろテトラの中のことなのだから、下へしかもつていけない。ただゆるめたりすると、隙間に入ってしまった、竿先ではグイグイと引いているのだが、それ以上一センチたりとも巻けない。ブラクリの所で岩に引っかかっているのだ。どうにもならずしばらくはじつとして魚が動くのを待つのだが、しびれを切らし、引っ張つてみるとプツツと切れてしまう。どうしようもない。釣れて

はいるのに、もうどうしようもない。

そして、ホンダワラの先端も海面すれすれまで伸びて、さらに海面へ広まり始めたころ、ポツカリと穴があいたような所があちこちとできてくる。

つまり、そのあいた所へ、こんどはボイト投げ入れるのだ。目の前だったり、十メートル向こうだったりする。スルスルと赤いブラクリが沈んで底に着く。さあそこからだ。しばらくしてこなければ少しだけ引く。ただ、その時はせいぜい十センチ位だけしか引いてはいけない。アブラメはすでにエサが落ちた瞬間からじつと底から見ていると思いなさい。底に着くとすぐそばに寄ってきて様子を窺っているはずだ。いれば、ゴツとあたりがある。しかし急に引いたりはしない。エサに軽く抱きつくともいえるのか、重さも十分感じる。だが、この段階で合わせてもまずかかりはしない。まだまだと、もう十センチ引く。エサは底を十センチ引きずられた。アブラメもついてきている。またゴツ、ゴツとくるが、まだ早い。あと一回ゴツと来たらもうこつちのものだ。キツと鋭く小さく合わせる。アブラメの重みが乗っていたらもう大丈夫だ。グイグイと頭を振る大きな引きをゆつくり巻き上げる。テグ

スは時にキーンと振りつめた音を立てる。アブラメの重みと、藻とからみながら暴れる両方の負荷が、おもいきり竿をしならせるのだ。もう三十五センチくらいとか、アブラメの大きさはあたりの時の按配からわかっている。

慎重に、慎重に。ところで、私たちはタモを持ち歩かない。溪流釣りでもそうなのだが、水と陸は魚にとつての生死の境目だ。それが海面ギリギリで外れるということは、これは魚にとつての幸運というものである。それが、すべて陸地から海の中まで手を伸ばしてタモですくうとなると、タモは人間に優位すぎる。外れたにしても仕方がない。こつちに運がなかっただけの話だ。もつとも船釣りではタモは必携だが。

しかし、テトラでの取り込みはことさら難しい。自分も海面すれすれまで降りていく。そしてアブラメに空気を吸わせ、ゆっくりと竿にぶら下げて、左手で脇に抱いて捕まえる。足許が悪いなかでは絶対アブラメを暴れさせられない。だから必ず左手には軍手をはめておく。素手では絶対に取り込めない。そしてビクに入れる。ここで、デカイのであれば、頭から入れなくてはならない。尾から入れた日にはバ

タバタと跳ねたとたんビックからアブラメは飛びだしてしまう。且つその場で口から針を外すことはしない方がいい。そうしているうちに暴れられたら、もう足許は海なのだ。糸をゆるめ、そのままビックに入れ、針がかりしたままブラクリごとテグスから切って入れておけばいいのだ。だから腰には根がかりする分もふくめて、ある程度の余裕をもつてブラクリを用意しているのだ。ともかく良く釣れた。私の一番大きいのは四十二センチのアブラメだったが、K君はもつと大きいのを上げた。いつも満足感があつた。

何もかにもが直接この手でやっている、その感じがたまらないのだ。今はとてもじゃないが、足腰が弱くなり、やろうにもやれない。テトラからテトラへ、飛ぶように移り渡っていった頃、そんな時代の懐かしい釣りだ。

ただ、釣りは何にかかわらずナメてはいけけない。どんなところにも危険が潜んでいるのだから。

十一月に入ってからだと思う。その日は寒く、少し風もあり、テトラに渡るにはどうかと思うような日だった。どこかの岸壁釣りでもいいのだが、二人は考えた末、

渡ることにし、いつものように準備し、工事現場でよくみかける虎ロープでテトラにボートを繋いでおいた。その日は風は沖へ出ていて、ボートはアメンボのように風に流され、テトラにたどり着くのはやたらと早かった。

釣りはじめたのだが、その日はなぜか、釣りに専念できない。つまり、波と風が不穏で、胸がザワザワして止まらない。彼はと見るとなんでもない様子なのだが、どうもいけない。高所で縮み込んだあの感じがいつまでも続いた。いつもだと二〜三時間かそこらでやるのだが、早めに、一度ボートまで戻ってみることにした。手で伝い、足で摺るようにしながら、ボートまでたどり着いた。

「K、早く戻れ」

私は大声で叫んだ。風にかき消されて、私の声は彼になかなか届かない。なんと虎ロープが擦れに擦れ、何十本ものナイロンの糸で擦られたものが、ほんとに一ミリもないような糸一本で繋がっているのだ。波で上下し、テトラのコンクリートの角でこすれていたのだ。やっとボートを手をつかみ、まずは胸をなでおろした。

もし、切れてボートが沖にでも流されていたら。今のようにケータイですぐ連絡

などとれる時代ではなかった。私たちは沖のテトラから「オーイ、助けてくれー」と大声で叫びつづけなければならなかった。あとで思い出しても、その日は船の出入りがほとんどなく、何時間叫んでいたら気づいてもらえたものだったろうか。

だから、私は胸さわぎとかを、そんなこととはいわず、直感を大事にすることにしている。きょうはこれでやめ、と思つたらやめ。まだまだとか、欲張つてはいかない。今日釣れなくても、明日来ればいい。いや来年でもいい。

せつかちに、人間の思いの日時だけで自然とつきあつてはいけけない。私が生きていさえすれば、また魚とは会えるのだから。

平成23年6月